

各学年授業風景

5年生の部の授業（社会）

3年生の授業（社会科）

1年生の授業（算数）

6年生の部授業（家庭科）

4年生の授業（音楽）

2年生の授業（生活科）

百名っ子

各学年の授業風景。発達段階に応じた指導方法でどの学年も集中して取り組んでいます。

〈学校教育目標〉
目標を持ち自ら学ぶ子
心豊かで決まりを守る子
健康でたくましい子

令和2年9月18日
第10号
校長

校長室から～「非認知能力」って？～

「職業人生の中で決めてになる能力は何かと言えば、学力やIQや知識などの「認知能力」以上に、個人的な性格の特徴に関する「非認知能力」が重要ではないか」（慶応大学 鶴教授）。学校の成績だけで人生の成功が決まるわけではないのは承知の事実ですが、2000年のノーベル経済学賞を受賞したJ・ヘックマンは、非認知能力を「性格スキル」と呼びかえ、学歴とは関係なく性格スキルと賃金の間に有意な関係があることを証しました。

その性格スキル（非認知能力）とは次の5つ

- ①「開放性」（好奇心・想像力・審美眼）
- ②「真面目さ」（自己規律・粘り強さ・熟慮）
- ③「外向性」（積極性・社交性・明るさ）
- ④「協調性」（思いやり・やさしさ）
- ⑤「精神的安定性」（不安・いらいら・衝動がない）

※このうち最も重要なものは「真面目さ」で、

鶴教授は真面目さを「野心を持ち目標に向かって自分を律しながら、どんな困難があっても粘り強く責任感を持って努力していく資質」と捉えています。「目標」「自分を律する」「粘り強さ」「責任感」「努力」の言葉で表せるこの資質は、確かに授業でも育てることができますが、その多くは普段の生活場面で育つものだと思います。

先ほどの言葉を反対語で表してみましょう。「夢・目標がない」「自己中・わがまま」「諦めが早い・粘り強さがない」「無責任」「怠惰・怠け」になるのでしょうか。これらの資質は、学校では清掃や係活動などで、家庭では、お手伝いや習い事（スポーツ）などの日常場面で知らず知らずのうちに身についてくるものと思われまます。また、これらは、「自分ができる」（自己肯定感）や「自分は役立つことができる」（自己有用感）の育ちとも深く関係しています。学力などの「認知能力」は、「非認知スキル」と深く関係しているのです。

人権教室

今月十七日、人権擁護委員の先生を迎え「人権」についての授業を三年生と六年生で行いました。（他の学年は今後行います）六年生では、「いじめ」問題をとり上げ、いじめを起させない為に何が大切かを考えさせる授業でした。「思いやり」「勇気」「協力」「行動」などの言葉がでてきました。その通りだと思います。「いじめ」は、いけないことだと頭では分かっている六年生。頭では分かっているにもかかわらず「いじめ」です。授業後、「いじめは解決できるのだろうか？」と、六年生のある男子に聞いてみました。「いいえ、簡単じゃない。」と答えました。私も思います。だからこそ、大人も一緒になって考えるべき問題だと思えます。先生曰く、「コロナいじめ」もあるそうです。

六年 五年 四年 三年 二年 一年

【級長】

【副級長】

「二期の級長・副級長」
二期の新しい級長、副級長が決定しました。本来ならば、学級役員任命式の朝会で役員証を渡すのですが、一学期同様、新型コロナウイルス感染症防止のために、朝会を持たず学級担任が証書を授与しました。例年なら運動会等の学校行事が多い二期、学級役員の出番も多いのですが、今年は、そうとも限りません。しかし、学級をまとめる仕事と責任は変わりません。がんばってほしいと思います。